

学年の絆 ～感動の文化発表会に寄せて～

17日（木）に開催された虹色文化発表会は、感動のうちに幕を下ろしました。大変多くの保護者の皆様にも足を運んでいただき、発表・演奏ができましたこと感謝いたします。

合唱練習が始まる際に3年生に伝えたことは「歴史をつくろう」ということです。音楽科の授業として技能の向上やこれまでの学習を深めることと同時に、賞の色を越えたところにある「学級・学年として仲間と協力して創り上げることの意味」を見出すことを目標としました。選曲の段階から歌詞の内容や曲の構成などを熟慮し、みんなで悩みながら決定した自由曲。練習当初は自分のパートを覚えるだけでも大変でしたが、いつの間にか声の重なりに楽しさを見出している様子が見えてきました。

また、今回は7クラスが互いをリスペクトし演奏に臨んでいました。曲紹介でもお気づき頂けたかと思いますが、前後のクラスと表現をつなぎながら個性を出すことにも挑戦しました。2組の演奏から学年合唱までを大きな「ひとつの組曲」のようにとらえて、全員で『3年生の部』を表現すること、これも今までにない試みでした。

そして何よりクラスの入賞以上に、3年生が目標としていたのは「みんな素晴らしくて審査することができない」という審査員からの言葉を引き出すこと。演奏後の指導講評の第一声が「感動、すばらしい、審査できない」を受け、生徒たちが顔を見合わせ、満面の笑みを浮かべていたのが印象的でした。

合唱だけでなく、英語スピーチでは仲間と切磋琢磨する中で自分を一步前に歩ませたことが語られました。また、手話を使っての8.9組の「翼をください」や、袖から聴こえる有志合唱団の「Amazing Grace」にも耳を傾け、合唱の良さを感じ温かくも盛大な拍手を送る姿、太鼓部や吹奏楽部の演奏を盛り上げ会場の熱をあげる様子、会場は「コンクール」ではなくまさに「音楽祭」でした。そんな雰囲気を作り、みんなで楽しむことのできる学年集団に成長していることに目頭が熱くなりました。

コンクールはその場の「一回」の演奏で評価しますが、そこまでの努力がしっかりと見えるのも事実です。「やっているつもり」「わかっているつもり」では評価者に伝わらない、評価はされません。どんなに練習を重ねてもいつもと違う環境では失敗することもあります。そこでどうリカバリーするか、場合によっては仲間と助け合えるか、ということが見えました。これは入試も同じこと。日々の努力が評価されるにはどのくらいの努力が必要か、万が一の時に対応できる力があるか、そんなことを考える良い機会になったと感じています。「受験は団体戦」といわれます。みんなで「雰囲気を作る」「教えあって学ぶ」に加え、「助け合う」ということも発見できた行事でした。